ミミのおまけ

小択出新都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ミミのおまけ

【Ｎコード】
Ｎ０５５７Ｓ

【作者名】
小択出新都

【あらすじ】
『恋する食用うさぎ』のおまけです。
おまけなので期待しないでください。

ミミのごしゅじんさま

森で出会った兎は、純粋で可愛い獣人の女の子だった。

＊＊＊

その日、僕はいつも通り馬で森を散歩していた。

午後からはメイ先生の授業があるので、もうすぐ城に戻らなければならない。

メイ先生は良い先生だ。王子である僕にも、遠慮せず厳しく教えてくれる。内容の質も高く、本当に勉強になる。だからこそ、さぼりたくなってしまうのは人の性じゃないだろうか。

「う～ん、何かないかなぁ。」

「何かって何ですか。何もありませんよ。ここは平和な森ですからね。」

僕がさぼりたい気分になっていることはわかっているのだろう。側近のシュウは僕を少し睨んでいる。まあ、ここで僕を拘束してしまわない点が甘い男だと思う。

かといって僕の方もいい加減さぼろうとしすぎて、母上に今度さぼったら部屋に一ヶ月缶詰にすると言われているのだ。さぼるためには何か正当な理由を考えなければならない。

その時だった。

「たすけて！」

そう声が耳に届いた。後から考えると小さい声だったのかもしれない。でもそれは、はっきりと聞こえた。

その声が聞こえた瞬間、僕は馬を走らせた。

目に映ったのは、この平和な森では珍しい野犬の姿。

犬は飼いならされてるイメージがあり危険なものと認識されることは少ないが、野犬の犠牲になる人間は狼などの犠牲になるものよ

り多い。
弓を背中から出し、即座に矢をつがえる。
狩りはあまり好きではないが、王族として身をまもるため常に腕を磨いている。
野犬は獲物に狙いを定め今にも飛びかかろうとしている。つるを引きしぼり狙いを定める。
だが、先に野犬が動いた。地面を蹴り、弧を描き、獲物に飛びかかる。
僕は小さく息を吸い、すぐさま射線を横にずらすと、野犬の進行方向に矢を解き放った。
間に合え！
風切音と共に、矢が木々の間を突き抜けていく。
スタンッ
放った矢は野犬の首を貫き、その体を横に吹き飛ばした。
「大丈夫かっ！」
そのまま馬を走らせて、野犬のいた場所までたどり着く。野犬は自分の一撃ですでに絶命していた。しかし…。
「あれ？」
あたりを見回すが、誰も被害者らしき人は見当たらない。おかしい。確かに声が聞こえたはずなのに。
その代わりにと言ってはなんだが、何故か震えている兎が一匹いた。小さいからだでぴくぴく震えているのに、僕が近くにいても逃げようとしない。不思議な兎だった。
「セルドさま、急に駆け出されてどうしたのですか！」
後ろからかなり遅れてシュウが馬を走らせやってくる。あの声は、確実に僕が逃げ出そうとしたと思っている。
「いや、悲鳴が聞こえたんだよ。それで野犬の姿が見えたから、きっと人が襲われているにちがいないと思ったんだ。」
「人…？うさぎしかおりませんが。」
シュウの言うことは事実だった。そして確実に僕を疑っている。

だが、僕が言っていることも事実なのだ。
「うーん、確かに聞こえたんだけどなぁ…。」
「また適当に理由をつけて勉強の時間をさぼろうとしたのでしょう。メイ先生には報告させていただきますからね。きっときつい罰をくださいますよ。」
メイ先生の罰といえば、王国史一冊分書き写しや膨大な量の算術の問題だった。さぼる方法が無いか考えていたのは事実だが、実際にさぼろうとしたわけではないのでちょっと不条理な気分だ。
見ると兎は真ん丸の瞳でこちらを見ている。その瞳を見ると、まあ仕方ないかと思えた。被害者はいなかったのだが、被害兎はいたのだ。それを救えただけ良しとしよう。
そう思って重い罰が待つ王城に、ちょっと憂鬱な気分で帰ろうとしたとき、後ろから声が聞こえた。
「あ、あの、ひめいをあげたのはわたしです。そのひとのいってることはうそじゃないです。」
幼く必死なで、僕を助けてくれようとする声。振り向くと兎がしゃべっていた。呆気にとられると共に、その兎がただの兎でなかったことを悟る。
「獣人だったのかっ！」
ぼくたちの驚いた声に、その子の体はびくりと震えた。そして悲しそうな寂しそうな瞳で、ぺこりと頭を下げる。
「たすけていただいて本当にありがとうございました。このごおんはわすれません。」
そう言って足を引きずってさっていく兎の子。僕はその子を抱き上げた。じたばた暴れだす。
「こらっ、暴れないで。うん、怪我してるね。」
足は痛々しく出血している。でもそれほど傷は深くないようだった。
「シュウ、この子は連れて帰るよ。」
この子を連れて帰りたいと思った。何故か、森に帰してしまいた

くないと思えた。うちの城ならば、この子も危ない目にあったりしないだろうと思った。
シュウは溜息をつきながらも、同意をくれる。
「はぁ、セルドさまの気まぐれをいちいち止めるなんて無駄な苦労はいたしませんよ。ご自由にどうぞ。」
その返事に満足すると、僕は兎の子をもう一度見た。
「ねぇ、君。僕がメイ先生の罰をのがれるには、君の証言が必要なんだ。僕と一緒に来て、メイ先生にさっきのことを説明してくれるかい？」
実際、証言してくれるのはシュウで良かったけど、こう言った。この子は少し人間に怯えているようだったから。
「君の名前はなんて言うの？」
名前を聞いたけど、なかなか答えはかえってこなかった。言いたくないのかもしれない。
「いや、僕が名前をつけよう。きれいなかたちの耳をしているし、ミミなんてどう？」
名前を言いたくなさそうだったから言った言葉だけど、少し独占欲も交じっていたかもしれない。ミミという新しい名前を付けてしまう。
ミミもこくりと頷いてくれた。
「そうか。じゃあ、君は今日からミミだ。よろしくね、ミミ。」
それが僕がミミとはじめて会った日だった。

＊＊＊

ミミを城に連れて帰ると、目を開いて驚いている様子だった。兎だけど、表情は豊かだ。
城にミミを連れていくと、侍女にとられてしまった。洗って傷を治療して返されたけど、僕がやってあげようかと思ったのに。
きれいになったミミはうすい桃色をしていた。

そういえば、獣人は人間にもなれるんだっけ。そう言った僕に、ミミは人間の姿になってみせた。毛並みとおなじ薄いうす桃色をした綺麗な髪の可愛らしい少女。でも裸だった。

そのまま無邪気な笑顔で首をかしげる少女に、侍女が慌てて飛んでくる。また連れて行かれるミミ。帰ってきたときは綺麗なドレスを着ていた。良く似合っている。

やっと僕がミミをかまえると思ったら、メイ先生に呼び出しをうけた。すっかり忘れていたが授業だ。しかも遅刻確定だ。

今日はミミのことがあるし、シュウも言い訳に協力してくれるだろう。そう思って安心していったら甘かった。

出てきたのは膨大な量の課題。これを解くまで授業は終わらないという。明らかに罰だったが、今日の授業内容と言い張るメイ先生にはかなわなかった。

結局、部屋に戻れたのは日が沈みきったころ。ミミは元気にしてるだろうか。

部屋に戻ってくると、ミミは大人しく椅子に座ってくっきーを食べていた。とても幸せそうな顔をしていて、見ているこっちまで幸せな気持ちになってくる。

「おいで、ミミ。」

そう言うと、とてとてとこちらに駆け寄ってくる。それを抱き上げて腕に収める。兎のときもちっさかったけど、今でも腕に収まってしまう程小さい。

「ぼくがいない間、暇じゃなかったかい？」

「だいじょうぶでした。」

くっきーがとても美味しかったという。よし、毎日食べさせてあげよう。

家族はどうしたのだろう。獣人だから、たぶん捨てられたのだと予想はつく。それでも、一応聞いておかなければならない。もし、この子を心配している家族がいるのなら帰してあげなければいけない。

「ミミはどこから来たの？」
「森です。」
「森に来るまえはどこにいたの？」
「村にいました。」
「ミミはその村に帰りたい？」
「帰ってきちゃいけないと言われました。」
ミミの答えを聞いて心が痛む。こんなに小さいのに、捨てられてしまったのか。そういえば兎の姿も随分汚れていた。ずっと森の中で暮らしていたのかもしれない。
獣人への待遇を良くしようとこの国はいろんな変革を行ったが、未だまったく根付いてないことがわかる。
この子を助けられて良かった。
「そっか。じゃあ僕と一緒にいる？」
「はい、一緒にいたいです。」
たずねる僕に、ミミは迷うことなく頷いた。
「じゃあこれからはずっと一緒だよ。よろしくね、ミミ。」
「はい、よろしくおねがいします。ごしゅじんさま。」
ごしゅじんさま？
もしかして、僕に飼われると思ってるのだろうか。そんなつもりは無かったんだけどなぁ。
でも城での立場も曖昧だし、説明も難しいからそういうことにしておいたほうがいいかもしれない。
僕はその日、嬉しそうに笑うミミと一緒に寝床についた。

ミミのごしゅじんさま2

それからミミとの生活がはじまった。
「ミミ～」
僕が呼ぶと、ミミはこちらへ駆け寄ってくる。
「どうしました～？ごしゅじんさま～。」
「これから釣りにいくから着替えておいで。」
侍女たちの用意した青いドレスは似合って可愛らしいけど、釣りには不向きだ。といってもミミを着飾らせたがる侍女たちは、あまり僕と遊ぶ用の服を用意してくれないのだけど。仕方ないから僕が直接仕立て屋に依頼して作ってもらっている。
ミミは僕の言葉にきょとんとして、首をかしげる。
「でも、今日はメイ先生のじゅぎょうじゃないですか？」
「今日はとてもいい天気だから釣りを優先させていいんだよ。」
「そうなんですか～。」
僕の言葉にミミは素直に納得する。しかし、そううまくはいかなかった。
「殿下！ミミさまに嘘を教え込まないでください！ミミさま、セルドさまの言ったことはすべて偽りです。」
耳ざとい侍女たちが、聞きつけて飛んでくる。僕が授業をさぼることより、ミミが嘘を教え込まれることのほうが重要らしい。
「うそだったんですか？」
「ミミと一緒に釣りに行きたかったんだ。仕方なく嘘をついたんだよ。」
僕の言葉にミミは悲しそうな顔をした。
「ごしゅじんさま、うそついたりじゅぎょうさぼったりしたらいけませんよ。」
ミミの純粋な瞳に、思わずうっとなる。
「わかったよ。ぼくも行く。そもそもミミがいないと遊びにいく意

味もないしね。」
　ミミは素直でがんばり屋だ。ミミが城に来てからは、侍女たちも何かにつけてミミの面倒を見たがる。僕への監視はそのおかげで薄くなったのだけど、ミミと一緒に遊べなければ意味がないので、状況的には厳しくなったと言える。
「こんにちは、セルド殿下、ミミさま。」
「こんにちは～、メイせんせい！」
　厳しいことで有名だったメイ先生もミミが来てからは、柔らかく微笑むようになってきた。相変わらず僕には厳しいけど。ミミは成績は良くないけど、授業にはまじめに取り組む。生徒としては僕なんかより好ましいのだろう。
「セルド殿下、さぼらないでください。」
　バシッ
「いててっ。」
　メイ先生がミミに付きっきりで教えているうちに、それを見ながら休憩しようとしてたらあっさり見つかった。

＊＊＊

　部屋に戻った僕はミミを抱きしめる。
「どうしたんですか？ごしゅじんさま。」
　ミミはきょとんとした顔で、僕の顔を見上げてくる。
「ミミは人気者だね。」
「そうなんですか～？」
「そうだよ。」
　ミミは城にきてからあっという間に、みんなの心を掴んでしまった。無邪気な笑顔、可愛らしい仕草、素直で優しい性格で侍女たちだけでなく、城に訪れる貴族たちやその息女、兵士や騎士たちにも人気がある。
　みんなが構いたがるものだから、僕が触れられる時間がその分短

くなる。
「あんまりみんなと仲良くしすぎたらだめだよ。」
僕のそんな言葉にミミはよくわからないと言った顔をする。
「みんなやさしくしてくれるのにだめなんですか？」
「僕がみんなにずっとチヤホヤされてたらミミはどう思う？」
「ごしゅじんさまがにんきだとうれしいです。」
ミミの笑顔は曇りない。僕ははぁと溜息をつく。
まだ嫉妬なんて知らないんだろうね。
「でも僕が人気ものでみんなと仲良くしてたら、ミミとあんまり遊んであげれないよ？」
実際はミミのほうが引っ張りだこなので、僕が暇になってるのだけれども。
「それはさびしいです。」
ミミは想像したのかシュンとうなだれてしまう。
「ごしゅじんさまはそうなったら、ミミとはあそんでくれませんか？」
「とんでもない！ミミとずっと遊ぶよ！」
「えへへ～、よかった～。」
なんか話が違った方向にいった気がするけど、ミミの笑顔が可愛いからと納得しそうになる。でも、もうちょっとだけがんばらなければ。
「だからミミも僕とだけ遊ぼうね～。」
「はいっ、えいいどりょくします！」
ミミは笑顔でうなずく。
「……、それ誰から教わったの？」
「女官さんがごしゅじんさまの言うことにはこう返事しなさいって。」
女たちはしたたかだ…。

ミミのごしゅじんさま3

最近、ミミの様子がおかしい気がする。
近頃は字がだいぶ読めるようになって、図書室で本を読んだりしているのだけれど。何か様子が変だ。僕が何かしているとじーっと見てくる。遊んでほしいのかなと思って、ぱぱっと手早く終わらせると何故か悲しそうな顔をする。
「ごしゅじんさま、てつだうことありませんか〜？」
「ううん。ぜんぜん大丈夫だよ。」
そういうミミの頭を優しく撫でて上げる。いつも笑うミミの笑顔が少し悲しそうなのは気のせいだろうか。
それに最近、心配事がある。城の者の多くはミミのことを好いている――それはもう僕が困るほどに。でも決して好意的な人間ばかりではない。
市井の人間たちの間では、まだ獣人への差別が根強い。下働きのものの中には、露骨にミミに冷たい視線を向ける者もいる。ミミにはあまりそんな人間がいることを、気付かせたくない。だから侍女たちに注意させる程度に留めているけど――。
部屋にもどるとちょうど、図書室から帰ってきたミミが嬉しそうにかけよってきてこういった。
「ごしゅじんさま、わたしをたべてください。」
思わずくらりとなる。
「そんなこと言ったらだめだよ。」
まだ幼いとはいえ、ミミはとても可愛い容姿をしているのだ。万が一、他の男にそんな台詞を言ったら、血迷った相手に襲われるかもしれない。
侍女たちはミミにいろいろと教えているようだが、これはちょっといきすぎだ。後で注意をしておかなければならない。
そうのんきに考えてた。

ミミがこのときも悲しげな表情をしていたことに、気付かないまま…。

＊＊＊

最近よく寂しい表情をするミミのために仕事を珍しくまじめに――それはシュウが驚かんばかりに――こなした僕は、ミミに会うため部屋に戻ろうとしていた。

調理場の前を通りかかったとき目に映ったのは、桜色の綺麗な毛並み。

ミミ？

僕が疑問に思う間に、ミミは調理扉に入ってしまう。

何をしているのだろう。しかも兎の姿になって。そう疑問が浮かんだとき、悲鳴が聞こえた。

「きゃー！ミミさまが！」

「はやく！はやく火を消せ！」

悲鳴がひびいた瞬間、背筋が泡立った。

駆け出し調理場の扉を開ける。目に映ったのは赤い火の中にいるミミの姿。

「セルドさま、危険ですおやめください。」

頭は真っ白だった。ただ無我夢中で手をのばす。じゅうっと何かが焼ける音がしたが気にならなかった。痛みも感じなかった。必死でミミの体を掴み、火の中から抱き上げる。

「ミミ！ミミ！」

綺麗になった桜色の毛が真っ黒にこげ、焼き切れた毛の間から赤く爛れた皮膚の色がのぞく。自分の手も同じように火傷していた。だが、それ以上に目を開かないミミの姿が心に痛みを走らせた。

何故…。幸せじゃなかったのか…。何か酷い目にあわせてしまったのか…。火の中に飛び込むなんていったいなんで…。

「ミミ！おねがいだ。目をひらいてくれ。ミミ！」

僕が何か君を傷つけてしまったのなら謝る。どんなことでもしてみせる。だからお願いだ。もう一度、目を開けてくれ。
「ごしゅ…じんさま…。」
腕の中、小さな体を横たえたままのミミの目がわずかに僕を見た。わずかな安堵とが胸に流れたが、その弱々しい姿を見てこうしている場合ではないことに気付く。
「はやく医者を。」
「連れてまいりました。」
シュウがどうやら連れてきてくれていたらしい。ずっと抱きしめていたいという衝動を抑え、治療のため連れて行かれるミミの姿を見送った。

ミミのごしゅじんさま4

ベッドで眠るミミの顔。しかし、その寝顔は決して安らかなものではない。時折、呼吸が浅くなり苦しげな顔をする。その表情を見るたびに、心臓が鋼の糸で締め付けられたように痛む。

「ミミ…。」

呟く声は、空虚に部屋に木霊した。いつも部屋を明るく満たしていたミミの元気な声は聞こえない。

手を伸ばしミミの小さな手を握る。

「ごしゅじん…さま…。」

起こしてしまったのかと思ったが、瞳は開かない。寝言なのだろう。包帯に包まれた手は、僕の手を弱々しく握り返してくる。表情が少し安らかになった気がした。

ガチャリ

扉を開く音がした。

「ミミちゃんの様子はどう？」

「母上。」

部屋に入ってきたのはこの国の王妃であり、僕の母であるメリーナさまだった。

「大分落ち着いてきました。しかし、火傷が痛むようで時折、苦しそうな顔をします。」

「そう…。」

母はベッドで眠るミミに静かに歩み寄ると、その額を優しく撫でた。そして眠っていることを確認し安心した表情を見せた後、その顔つきを厳しいものに変え僕に向かっていった。

「今回の件、あなたにも原因があるわ。」

「はい。」

今朝、意識を取り戻したミミに、何故あんなことをしたのか理由を聞いた。本当は安静にしてあげなければいけなかったのだが、ど

うしても自分を抑えることができなかった。
「ごしゅじんさまに何か恩返しがしたかったんです。わたし、ごしゅじんさまになにもできないから…。だから、せめて美味しくたべてほしかったんです…。」
泣きながら僕を見上げるミミの言葉に、僕の心は震えた。
何故、ミミの心をもっと理解しようとしてあげなかったのだろう。傍にいたはずなのに、ミミが悩んでいることに気付いてやれなかった。そんな愚かな自分を責める気持ちと共に、どうしようもない衝動が浮かんできた。
まるでミミが言った通りに、本当にミミを食べてしまいたいような、そんな心が。
大切な妹のようなものだと思っていた気持ちは消し飛んだ。いや、ずっと前からとっくに心の奥底で自分の気持ちはそうなっていたのかもしれない。
唇は優しくミミを安心させるように、詐術を呟いた。
「その時が来たら僕がミミをちゃんと食べてあげるから、もうこんなことしちゃだめだよ。」
ミミがその言葉を聞いて、火傷の苦痛の中からでも安心したように微笑むのを見た。
それは詐欺師のように相手を騙すための言葉、何も知らない純情なミミを彼女の知らないうちに自分のものにしてしまうための言葉。
こんな純粋な心を持つミミを騙すのは、大きな罪過なのかもしれない。そのかわり、もう二度と傷つけたりしない。
母は自分の表情を見て一度だけ頷くと、後は何もいわなかった。
「セルドさま、準備ができました。」
シュウが部屋に入ってきて、小さな声で僕に呼びかける。僕は名残惜しい気持ちを抑えて、ミミとつながれた手を離し立ち上がる。
「わかった。すぐ戻ってくるからね、ミミ。」
僕はミミの頭をひとつ撫でて部屋を出た。

＊＊＊

シュウに案内された部屋の中にその女はいた。ミミに嘘を教え込み、その命を奪いかけた下働きの女。その顔をみて、僕の胸の中にどす黒い気持ちが湧き出てくる。

女は僕の表情を見ると少しびくりと震えたが、取り繕うように笑みを浮かべ頭をさげた。

「セルド殿下、ごきげんうるわしゅうございます…。」

機嫌が良いように見えるだろうか。

「釈明を聞こうか。」

一言でも余計にこの女の声を聞きたく無くて、僕は挨拶に答えを返すこともなく直接言葉を向ける。

「釈明とはなんのことでございましょうか。」

しらばっくれるように、女は言葉を返した。何も言わずに切り捨ててしまおうか。そんな冷たい気持ちが心からあふれてくる。しかし、ミミの顔が浮かんできてその考えを押しとどめる。

これから何度もミミを抱きしめる予定の手を、こんな女の血で汚すわけにはいかない。

「ミミに危険なウソを教えたことだ。」

「ぞ、存じませんが…。」

「これは警告だけど、王族に偽りを言えば罪になるよ。」

女は僕の言葉を聞き黙り込む。

「…。」

「それに裏はもうとれている。調理場の下女たちも、お前とミミが一緒にいたことを証言している。ミミも今朝意識を取り戻し、何があったのかを話してくれた。」

相手が口を開く前に僕は言葉を投げた。

女の顔色は目に見えて悪くなった。しかしその後、口元を歪め開き直った表情になり、僕に対していった。

「冗談だったのでございます！まさか、本気で取るとは思いもしま

せんでいた！」
「冗談？ミミは死にかけたんだよ。」
「それはあの子が馬鹿だからでしょう。それに例え私のせいで死にかけたとしても、あれは所詮、何の身分もない獣人でしょう。確かに殿下のお気にいりだったかもしれませんが、死んだところで大した罪には問えないはずです！」
　僕はもう少しで自制できず彼女を斬り付けるところだった。今も面倒くさくなって、そうしてしまったほうがいいと思ったが、シュウが耳もとで「ミミさまが部屋で待ってますよ。」と言ってくれたおかげでなんとか我慢している。
　女よ、シュウに感謝するといい。
「残念だ…。」
「そ、そうでございましょう。いくら殿下とはいえ、法を曲げることはできませんよ。」
「いや、うちの法律は獣人相手だからといって罪が軽くなることはないよ。基本的にみんな平等だからね。でも僕は残念なことに、君に最も重い罰を架したいために身分を利用しようと思う。」
「は、はい…？」
「ミミはね、準王族だよ。」
「は？」
「僕の婚約者だからね。」
「そ、そんなこと聞いたことがありません！」
「そうだろうね。でも事実だよ。シュウ。」
「はい。」
　シュウが差し出した紙には、ミミと僕が婚約していることが書かれている。もともとこの婚約は王宮内でミミの身分を確保するためのものだった。だから積極的に外に出したりはしなかった。
　ミミはこの書類の存在を知らないし、ミミがにいつか好きになる人が現れたら、この書類は秘密裏に破棄される。そんなものだったはずだった。

だけど、そんなこともうできるわけがないよね。
ミミに好きな人？考えただけではらわたが煮えくり返る。
僕が間違っていた。この書類はがんがん表にだしていくべきものだった。ミミに悪い虫が一匹たりともつかないように。
「準王族は、王族と同じ取扱いになる。君はミミに嘘をつき、侮辱し、あまつさえ命の危機にすらさらした。今後、まともに日の光を浴びれないと思った方がいいよ。」
女は真っ青になりがくがくと震えだした。
「あとは頼んだよ。」
「御意に。」
シュウに言葉をかけると、短く頷く。
僕は女に対する興味も失せ、それよりもミミと一緒にいるほうが有益だと思い椅子を立ち部屋からでることにした。
裁判で提出された書類から、婚約は公になっていくだろう。裁判での婚約発表というのが、ちょっと気に入らないが僕のミスだから仕方ない。ミミには全快したらお詫びにケーキを送ろう。
そんなことを考えながら、ミミのいる僕の部屋に向かう足をはやめた。

ミミのごしゅじんさま5

あれからミミの火傷も直り、城のものたちもミミの笑顔をまたみられるようになった。
最近、ミミは料理長に言われてよく散歩をするようになったらしい。そのせいか最近はいくぶん健康的に成長しているようだ。薄桃色の髪に、健康的な白い肌、すらりと伸びた体は、同世代の女の子たちと比べると少し小柄だが、もう立派な少女になっていた。
『食べてあげる。』、ミミはその言葉の意味をずっと勘違いしている。でも、その誤解を解くつもりはない。気づいたときには、僕の腕の中にいてもらうつもりだ。
そのことについて侍女たちに鬼畜と非難されているが、僕はまったく気にしない。ミミにそう言われたら少しは気にするけど、当のミミは無邪気な笑顔で僕に抱き着いてくるので、僕の計画は誰にも止めようがないのだ。止めさせるつもりもないけれどね。
「ごしゅじんさま、何か嬉しそうです。」
散歩から戻ってきたミミが、とてとてと僕のもとに走ってくる。僕の腰元しかなかった身長も、ちょうど胸の下あたりにくるようになった。それでも、無邪気な笑顔は変わらない。
「そうかい？ミミも嬉しそうだね。」
「ごしゅじんさまが嬉しいなら、ミミも嬉しいんです。」
「そうか、ミミは可愛いね。」
「えへへ～。」
明後日はミミの誕生日だ。そして僕たちの結婚式の日でもある。でも、僕はその前にミミを僕のものにしてしまうつもりだ。
ごめんね。純粋な君を騙して、まだ恋もしらない君を僕のものにする。
それでも僕の妻になってもらうよ。

＊＊＊

夜、はやる気持ちを落ち着かせ、部屋を訪れる。

「ごしゅじんさま？」

振り返ったミミは白いドレスに包まれ、月光の下、まるで幻のようにそこに立っていた。まるで月の精のようだ。そう思う。

「きれいだよ、ミミ。」

まるでミミがこのまま消えてしまいそうで、不安になった僕はミミの頬に触れた。柔らかい感触が、僕を安心させる。

ミミも何かを察していたのだろう。力を抜いて、僕に体をあずけてくる。

「おいしくたべてくださいね。」

力の抜けたその体は、僕を本当に信じている証だった。

ごめんね、ミミ。食べるといったけど、僕の意味は君が考えているものとは違う。

ミミの頬に手を添え、できるだけ優しく唇を奪う。唇を離すと、ミミは首をかしげた。

「味見ですか？」

本当に僕に食べられようとしているミミ。そしてミミを騙している僕。胸に浮かんできた罪悪感を消し去るように、今度は深くミミの唇に口づける。

「んっ。」

不思議そうな、無垢な声が、僕の腕の中で跳ねる。唇を離したとき、ミミの目は潤んでいた。

「おいしいですか？」

「おいしいよ。」

本当に食べてしまいそうになるくらいに。ミミがいなくなっては困るので、そんなこと出来るはずもないが。僕の答えを聞いたミミは、本当に嬉しそうに微笑んだ。

僕はミミをやさしくベッドに横たえる。そして白いドレスを脱い

で、その柔らかい肌を味わう。ミミは力を抜いて、僕にその身を任せてくれた。
そして最も大切な瞬間がやってきた。
ミミと僕の目が合う。何よりも澄んだ綺麗な瞳が僕の目と合わさる。その瞳に映る僕への信頼に、何よりも心がつながっている気がする。
森で出会った兎は、可愛い元気な女の子だった。
そして、その子は、僕の最愛の人になった。
「いまから僕がミミを頂くよ？本当にいいんだね。」
それは嘘を含んだ、偽りの言葉。
「はい。」
それでも彼女は、僕を信じ切って、何のためらいもなく頷く。
この女の子は、誰よりも純粋で清らかで、まだ男女の恋なんて知らないのだろう。そんな君を騙して、僕は君を自分のものにしてしまう。
もし、君が成長して、それを知る歳になったら僕を怒るだろうか。でも、そうなっても、僕は君を離せそうにない。
だから、精一杯がんばって、未来の君に惚れてもらえるようがんばるよ。
そして君を幸せにする。
そうして、僕とミミは結ばれた。

＊＊＊

盛大に飾り付けられた大きな広場で、赤い絨毯の上を二人の男女が歩いている。
一人は白い清らかなドレスを着た可愛らしい少女。もう一人は、黒いタキシードを着た美しい青年。二人は仲良く手を結び、神に永遠を誓う道を歩いて行く。
それを見守る人間たちは、いくつかが反感を持った目で見ている

が、それより多くの人間が二人を祝福するように笑顔で見守っている。
「永遠の愛を誓いますか？」
神官が少女に問いかける。
少女は少し小首をかしげたが、青年に耳打ちされたあと頷いた。
「僕のことがずっとずっと大好きかってことだよ。」
「はい。」
少女の答えは、この上ない笑顔だった。
「永遠の愛を誓いますか？」
その質問は、今度は青年に向けられた。
「はい。」
頷いた青年の顔は、神妙で決心のこもった表情だった。
それから二人は口づけをして、広場は大きな歓声に包まれた。
「またまた味見ですか？」
そんな少女のつぶやきも、さっき青年が少女に耳打ちした言葉も、神官には全て聞こえていたが、全て聞こえないふりをした。
「あの子も馬鹿ねぇ。」
そう呟いたのは、全てを見守っていたこの国の王妃だった。
「あなたになら食べられてもいいっていうのなら、それは何よりもあなたを愛しているってことなのにね。」
それはこの国の新たなる皇太子と皇太子妃の結婚式での話。

ミミのごしゅじんさま5（後書き）

この作品を応援してくださった方、本当にありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0557s/

ミミのおまけ

2011年8月2日18時34分発行